



群馬県みなかみ町にある曹洞宗の古刹・泰寧禅寺（清峰山泰寧寺）。ここに奉納された高資の作品『聖なる山エヴェレスト』は、本堂で今日も多くの人々を出迎えている。

世界の中心に聳え立つ、 伝説の須弥山を描く。

高資が描く聖なる裸婦像は現実世界に存在する女性ではない。彼がその作品で表現しているのは、観音菩薩を内在する聖なる存在である。「菩薩」という言葉は自らが悟りを開くために修行する者を指すことも多いが、観音菩薩はそれらの菩薩とは異なり、人々の救済のためにわざわざ苦しみが多い世界に赴いてきた大慈悲心を持つ聖者なのだ。高資作品に描かれた女性たちが表面的な美しさだけでなく、内面から湧き上がって来るような神々しさを帯びている理由も、それで納得できる。

しかし、彼が描く聖なる存在は、裸婦だけではない。世界各地で信仰の対象とされる山も、その一つだ。例えば古代インドでは、世界の中心には須弥山と呼ばれる聖なる山が聳えており、そこには神仏が住むとされる。この須

聖なる山エヴェレスト 194.0 x 448.8 cm / 油彩 キャンバス / 2014 / 泰寧禅寺蔵



弥山思想は、バラモン教や仏教、ジャイナ教、ヒンドゥー教にも伝えられた。高資が聖なる山として描いたのは、エヴェレストだ。2011年3月11日、東日本大震災が発生した日に、「世界の須弥山はエヴェレストではないか」という思いに彼は駆られた。被災地の惨状に接し、須弥山頂上から降り注ぐ慈光で衆生を救済してほしいという願いを持ったのかもしれない。その年の11月末から12月にかけて高資はネパールに渡航。エヴェレストの絶景が目の前に広がる場所でスケッチをしている。雨期でもあり、現地を訪れるまでは天気が悪かったという。しかし、彼が到

着すると途端に天候は回復。太陽に輝く峰々を目にし、「釈迦と一体になれる場所」という思いを強くした。

日本に戻り、制作に着手しようとするが、なぜか描けない。理由は作品サイズだ。M120号のキャンバス4枚組。高さ約2m、幅約4・5mもの巨大な作品は描いたことがないからだ。構成や色に悩む高資。それから2年ほど過ぎたある日、神々しいエヴェレストの重厚さ、冷たさを描くために彼は筆を執り、そこから一気呵成に3ヶ月ほどで描き上げた。雄大で深遠な作品『聖なる山エヴェレスト』は現在、群馬県の泰寧禅寺で観ることがができる。